

# 2012年度 モンゴル・スタディツアー参加者報告

日本ユニセフ協会 学校事業部では、毎年、全国の学校のみなさんからのご支援をいただき、カンボジアとモンゴルを対象にした指定募金事業を行っています。支援先の2カ国の子どもたちの状況や事業を先生方に視察していただき、学校や地域での学習や広報活動に役立てていただけるよう、毎年夏にスタディツアーを実施しています。2012年度のモンゴル・スタディツアーに参加された小学校の先生の感想とスタディツアーでの学びを活用した授業実践をご紹介します。

日程	2012年7月22日(日)～7月29日(日)
日本ユニセフ協会の支援事業	遊牧民の子どもは、教育の機会を持たず、栄養や健康の面でも十分なケアを受けられていない。こうした子どもたちの状況を把握し、状況に合わせた子どもたちの栄養、保健、幼稚園教育の改善を進めている。
主な視察内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊牧民を対象とした移動式幼稚園の活動</li> <li>・厳しい状況下において、保護を必要とする子どもに対する支援活動</li> <li>・郊外のゲル地区の劣悪な環境のもとで生活する元遊牧民に対する支援活動</li> </ul>



©日本ユニセフ協会  
スタディツアー参加者とモンゴルの子どもたち

## 京都府 同志社小学校 教諭 振本 ありさ

### スタディツアー参加の動機

小学校で国際理解や文化を中心とした英語の学習を担当する中で、子どもたちに世界は広くて狭く、世界の隣人としてお互いに思いあう心を伝えたいと思っています。しかし、現代の情報社会に生まれた子どもたちは、テレビ等の情報から得られないことは知らない、ということが多いのではないのでしょうか。英語を話す国のみに児童の興味や関心が偏らないよう、幅広い異文化理解、特に近隣のアジアの国について考える機会を持つことも心がけてきました。自身がユニセフ学校募金の指定募金対象国モン

ゴルを訪れ、ユニセフの活動を学び、そして学んだことを児童に伝えたいという思いと、児童がユニセフの活動を知り、自分たちができることを考えるきっかけとなればという思いからスタディツアーに参加しました。



©振本 ありさ

### スタディツアーの感想

ユニセフモンゴル事務所の職員の方々の事業報告を聞き、また、私たちが日本で行ったユニセフ募金活動の先にある支援の様子を自分の目で見て学ぶことができました。職員にはアジア、オセアニア、アフリカからの国際スタッフとモンゴルからの国内スタッフの方々がいらっしゃいました。実際に職員の方が案内してくださった支援事業現場をみることで、日本の学校募金支援事業の成果を理解することができました。視察した施設は、都市部の学校施設、元遊牧民が暮らす集落や子どもたちが通う保健センターなどでした。他にも草原の中の移動式ゲル幼稚園や貧困家庭の所得向上を目的とした養蜂事業、寺院での僧侶たちへの非公式教育、ゲル地区の小学校等、モンゴルで多岐にわたる支援が行われていることを知ることができました。

どこへ行っても私の心を動かしたのは、モンゴルの人々のあたたかさでした。都市とは思えない厳しい境遇で暮らす人々、例えば未だマンホールの下の不衛生な場所で暮らす家族。遊牧民とし

て伝統的な暮らしを続けている家族。異なる条件の生活を視察し、この国の経済成長の中にある混乱と格差を目の当たりにしました。しかし、そんな中、どこへ行っても人を思いやる気持ち、あたたかいとびっきりの笑顔に出会い、胸が熱くなりました。明るい笑顔で、お皿からあふれんばかりの飴とお茶を振る舞い、迎え入れてくださるおもてなしの精神が印象的でした。遊牧民として伝統的な生活文化を残し継続していく人々と、モンゴルのこれからと子どもたちの幸せを考え都市で生活する人々。いずれの人々の心にもあたたかい心を見ることができました。

モンゴルの急速な経済成長の中で、安定した生活を送る条件が整っていない人がまだ多くいることを今回知ることができました。モンゴルの人々の文化の継承と経済成長のバランスを考えながら、何よりもモンゴルの子どもたちの未来の幸せを最優先に、また、子どもたちの教育、衛生、生活の安定のため、児童と一緒にユニセフ学校募金を通して支援していこうと思いました。